

妙な音

空っぽだと思った箱だけど  
振ってみると妙な音がした

人のささやき

人のうめきこえ

人のうた

雨

生暖かい風が

雨の匂いをはこんでくる

不吉な音をたてて

雨が

樋をしたらたりおちる

## 刃の光

虎のようなものが  
錆びたトタン屋根のうえを這っている  
何を嗅ぎつけたか知らぬが

目は

刃の光

## 闇

蛍光灯の下 光に手をかざす  
まぶしさの中に手は引きこまれ  
ずるずると引きこまれ 私はきえてしまう

闇をあるく

遠くに光の粒 足を速める

粒は大きくなる 手をのばす

粒は もっと もっと 大きくなり 私のからだをつつみこむ

光の中に

とけこむと闇があった

闇をあるく

しらない

一

光をまとった森の精が、  
木の切り株に腰をかけて、待っている。

ある日、街を歩いていると、めまいがした。  
ふらり、ふらりしていると、わたしを呼ぶ声が、かすかにした。

二

きょうは、何月の何日か、しらない。  
わたしは切り株に腰をかけている。

雨が降っている

そこには銀色の雨が

さらさらと降っている

うつすらとにじんだ太陽が

空そらのまんなかにかんている

ほかには何もない

わたしが立っているはずの大地はなく

足の下には さらさらと 雨が降っている

宿す

産み落とすことのないものを宿す  
奴は美と神秘をくれるかわりにわたしの体内をむさぼり とぐるを巻く  
奴の生臭い吐息はわたしを溶かし飲み尽くす

## 人形

細い枯れ枝のさきに  
首をくくった人形が垂れさがっている  
くもの糸よりもほそく鋭いものが  
白い肉に食い込んでいる  
人形はおんな  
まだ生きている  
目には涙  
口もとには赤い血が  
ほんの少し糸をひいている

## 鏡の天ぷら

フライパンの上で、人見知りの鏡の天ぷらを揚げました。  
わたしは涙の連絡船を口笛で吹きながら、  
ぱっくりと口をあけたロールパンに、  
ジャムとソーセイジと揚げ鏡を投げ込んで食べるのです。

厨房に吊り下げたシャンドリアは、  
太陽を気取ってわたしの背中に降り注ぎ、  
上着にこびりついた馬糞の上の蠅は難産で玉の汗。

黄金のキラメキは、こたつ板の上を這う三葉虫の目をくらませ、  
彼は井ぶり鉢の日陰に逃げ込もうともがくのですが、  
力みすぎて糞を漏らしてしまふ。  
晴れの舞台での、そそくに気が動転して、

ますますもがくのだが、ただただ、汚物にまみれるばかり。  
なすすべもなく地層の彼方に沈んでいく。

座布団に正座して、  
ジャムとソーセイジと揚げ鏡のロールパンにぱくつく。  
どうしても揚げ鏡だけが残ってしまう。

しかたがないので、  
鏡の天ぶらを箸ではさんで醤油に付けてひと噛みする。  
黄色のコロモは剥げて落ち、鏡の破片が歯茎に突き刺さったような。  
油でべとついた鏡を手にとって、  
わたしは、キャツ、と悲鳴をあげてしまった。

口のまわりを紅い血で塗りたくった異星人が、  
わたしをのぞき込んで、お化粧。

人見知りのわたしが、人見知りの鏡に映った異星人に笑いかけた。

鏡にくっついていたコロモの残りかすが、  
黄色い油の糸をひきながら鏡の上をすべって落ちた。  
なんときたない涙でせう。